

このコーナーは、学生が県内企業の経営者を訪問し、企業の経営実態や求めている人材等について直接聞き取ることで、学生と企業の相互理解を促進し、雇用のミスマッチ等を解消することを目的としております。

第5回目となる今回は、山梨学院大学法学部 法学科 1年 佐野一樹さんが、株式会社テンヨ武田の代表取締役 会長 武田與光 氏 を取材しました。



学生

山梨学院大学
法学部 法学科

1年 佐野一樹 さん

時代の変化に 対応する企業とは

経営者

株式会社 テンヨ武田
代表取締役会長
武田 與光 氏



▶ 学生

会社の経営理念は?

▶ 経営者

創業141年という社歴を振り返ると、創業当時は明治時代初期、当然電気などはなく書き物も毛筆で鉛筆もなく、すべて手作業で便利なのは何もない時代であった。時代は変わり、昭和になると戦争に突入し、すべてが焼けつくされてしまい何もなくなってしまった。それからここ50年ぐらいの間に高度経済成長期を経て、バブル経済になって物が溢れる時代になると企業間の競争が激しくなり、社業も苦しい時代があった。しかし、そんな中でも141年社業が発展を続けて来られたのは、その時その時に、世の中に役立つきたからだ。時代が変化していくにつれ、自分たちも変化を続けなければいけない。『不易流行』という言葉がある。いつまでも変化しないで変えてはいけないものの中にも、あたらしく変化を重ねるものも取り入れなくてはいけないこともあるということを常に考えてきた。

もう一つは、人が嫌がるような仕事を絶対にしないことだ。コンプライアンスはもちろんのこと、たとえ合法だったとしても人が眉をひそめるようなことはしないことを実行してきた。

▶ 学生

今の学生に足りないもの、必要となる力とは何か?

▶ 経営者

今の学生は保守的になってしまった。若いからといって最先端の知識を持っているという固定概念があるのも問題だ。私的な考えだが、若い人たちはどこかで一度挫折し

て、苦労したほうが良い気がする。ゆとり教育世代、また核家族化により兄弟が少ない子供たちは、特に客観性や競争力が失われてしまっているような気がする。社会の中で最も必要となるのは“競争心”だと思う。ガッツのある若い人が社会では活躍できるはずだ。

▶ 学生

県内で事業を行うメリットは何か?

▶ 経営者

県外で勤務した経験も少なく、県外のことについてはそれほどわからないが、例えば東京に進出するとすると人々の信用を勝ち取るのにかなり苦労すると思う。その点、山梨県は東京に比べて元々の繋がりがあって、人々はそれなりに評価をしていただけるというメリットがある。それが今の信用・信頼につながっている。

▶ 学生

学生時代に力を入れたことは何か?

▶ 経営者

中学生までは科学者になりたかった。人が知らない

取材を終えて...

初の男性レポーターということで最初は緊張してしまいましたが、武田会長はとても話し易く明るい方でしたので、終始和やかで良い雰囲気の中でお話を伺うことができました。今回のレポートの中で出てきた『不易流行』という言葉がテンヨ武田が141年続いてきた秘訣なのだと感じました。また、私たち学生は、時代の変化、企業の変化というものをいち早く察知して、職業選択に臨むべきだと思いました。私はまだ大学に入学して間もないですが、この時期から貴重な経験をさせていただき幸いに思います。今回の企業レポートに関わって下さった皆さんに感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



まとめ

私は今回のインタビューを通じて、企業は時代の変化とともに柔軟に対応していかなければいけないことを知った。『不易流行』という考え方が今の企業に必要であり大切なことであると思う。また、競争力や客観的に物事を見る力というものも、今の企業が求めているものなのであろう。そういった力をつけるためには、日常生活から意識していかななくてはいけないと感じた。